

私の  
フィールド  
ワーク

## モンゴルの牧畜をまなぶ

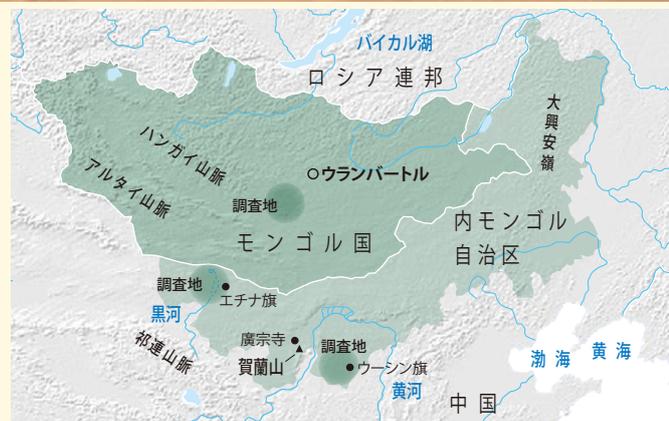
児玉香菜子 こだまかなこ / 千葉大学

モンゴルの牧畜を考える上で

重要なキーワードは草、水、家畜と多様性である。

フィールド経験からみえてきた

モンゴル牧畜の一端を紹介したい。



### 乾燥・寒冷のモンゴル

モンゴル高原は北と西をハンガイ山脈とアルタイ山脈に、東を大興安嶺、南をチベット高原につらなる祁連山脈に囲まれた高原地帯である(地図参照)。自然環境の特徴は乾燥と寒冷である。しかも、年間降水量は500mmから40mmと幅があるため、土地景観も森林、草原、砂漠と多様性に富んでいる。

モンゴル人の居住地は大きくモンゴル国と中国内モンゴル自治区(以下、内モンゴル)、ロシア連邦の3つに分かれる。わたしは1997年に初めて内モンゴルを訪問して以来、定住牧畜民を対象として内モンゴルでフィールドワークを続けてきた。主な調査地は内モンゴル西南部で流動砂丘が広がるウーシン旗(写真1)と、内モンゴル西部で礫砂漠に形成されたオアシス、エチナ旗である(写真2、3)。それに加え2011年よりモンゴル国で、季節移動を続ける牧畜民の調査もおこなっている(写真4)。

### 「草」を見る目

過去に中国内モンゴルに2年留学し、そのうちほぼ1年を流動砂丘地帯のモンゴル牧畜民の家で過ごしたわたしは、モンゴ

ルの牧畜民のことをそれなりに理解したと思っていた。ところがどうであろう、自分にいかに農耕民的な発想が染み付いているのか、そして牧畜民にとって草がいかに重要かを思い知らされた。そのエピソードをまず紹介しよう。

内モンゴル西部の賀蘭山の麓にある廣宗寺(通称、南寺)を、留学を終えて帰国する直前の2002年7月に訪問した時のことである。廣宗寺は18世紀に建立されたチベット仏教寺院で、非常に美しい寺院である(写真5)。ところがその庭には雑草がまさに茫々と生えていた。日本の寺院であれば、檀家さんがもちまわりで雑草抜きをするからこんなに荒れるがままに放置されることはない。そんなことを思いながら、寺院の庭を眺めていた。そのとき、60代のモンゴル人の僧侶が目を細め、とてもうれしそうにその「雑草」を眺めながら、「今年は雨がたくさん降ったから、草がよく育っているね」とわたしに語りかけてきた。わたしはハッとしました。わたしには「雑草」に映った草はモンゴル人にとってみれば家畜のえさであり、豊かさの象徴なのだ。だから、草を「雑草」としてみることもなければ、ましてそれを抜くようなこ

**写真1** オルドス地域  
ウーシン旗の定住牧  
畜民。ラバの荷車で  
羊毛を街に販売に行く  
ところ。(2001年7月)



**写真2** 礫砂漠に暮  
らす牧畜民。ラクダ  
とヤギへの水やり。  
(2003年9月)

ともない(写真6)。

### 「雨」を測る

その草をもたらしてくれるのが「雨」である。この内モンゴル留学をおえて日本に戻って間もない頃のことである。雨が3日ほど降り続いていたのだろうか。しとしとと降る雨を眺めながら、「どうしてこんなに雨が降るのだろうか」と家の中でふと考えた。そこでハッとした。「そうだ。ここは日本だったのだ」。日本では雨が降るなんてことはよくあることで、あんまり降るとうとうとしいくらいにしか思わない。だが、モンゴルではめったに雨が降らない。だから、とても重要で貴重だ。とくにわたしが滞在していた2000年から2001年はモンゴル高原全体が干ばつにみまわれた年だった。だから、モンゴルの牧畜民たちはちょうど草が成長しはじめる5月から来る日も来る日も南の空を見上げて、雨が降るのを待っていた。全く降らないわけではないのだが、ぱらぱら降って、すぐにやんでしまう。雨もそれなりの量が降ってくれないと草の生長には役に立たない。そのため、雨が降ると、必ず地面を軽く指で掘って、どれくらいの深さまでぬれているのか確かめていた。そう、雨の量は地表面から土がぬれた深さで測られる。その深さを表現するのが身体を使った単位である。たとえば、指の横幅をホローと呼ぶ。その横幅4本分の長さが4ホローとなるように、だ。

めったに雨が降らないからこそ、よく降ったときのことを鮮明に覚えている。エチナ旗の北東部で50代以上のモンゴル牧畜民が集まっているときに、雨がこれまでどれくらい降ったかをたずねたときのことである。みな口々にこの身体を使った単位で、何年に雨がどれくらい降ったかを教えてくれた。雨がきわめて多かったと認識されていた年はわずか3回だけだったが、実際の降水量のデータと見事に一致してい



**写真3** エチナ旗のオアシスに暮らす牧畜民。  
ロバでヤギの放牧。(2003年9月)

た。なかでも一番多かったのが1969年で、デリムほどになったという。デリムとは両手を広げた長さの半分の長さである(写真7)。この地域の年平均降水量はわずか39mmであるが、この年はその2.6倍の103mmもあった。雨が貴重だからこそ、雨が多かった年は記憶に刻み込まれているのである。

### 家畜の重要性

雨がなぜ重要であるかという点、先述したように、それは草、つまり、家畜のえさをもたらすからである。モンゴル牧畜民にとって家畜とはウマ、ウシ、ラクダ、ヒツジとヤギである。それ以外は「家畜」のカテゴリーには入らない。これら5種の動物はみな草食動物である。言い換えれば、人間が食することができない、直接利用できない「雑草」を食べしてくれるのが家畜である。家畜が「雑草」を食べて、良質のたんぱく質である肉とミルクを生産し、騎乗、運搬といったエネルギーをもたらしてくれる。フンは重要な燃料源である。毛と皮革は天幕家屋をはじめとするさまざまな生活道具の原料になるだけでなく、重要な収入源である。しかも、家畜は不動産である土地とは違い、動産で、「動く」し、「殖える」。



写真4 モンゴル国の牧畜民の放牧風景。冬季はウマに乗ってヒツジとヤギを放牧。(2012年12月)

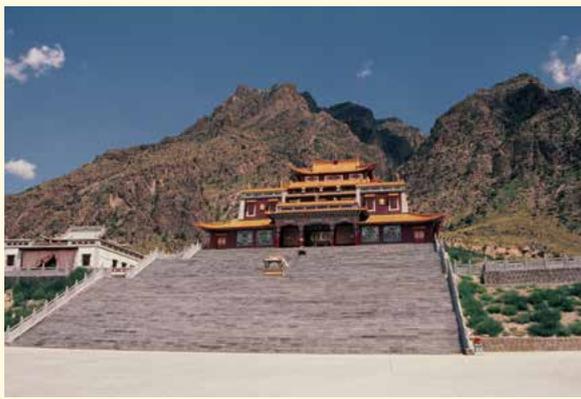


写真5 廣宗寺。(2002年7月)

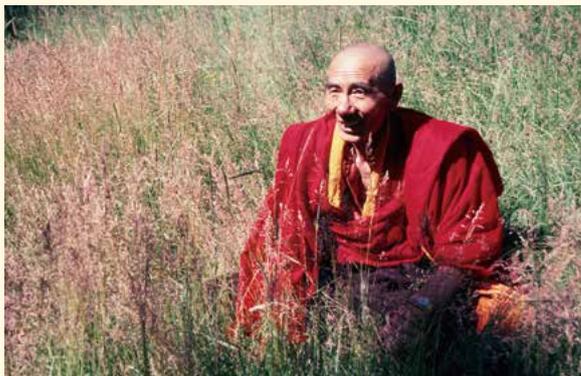


写真6 草原に座る僧侶。(2002年7月)

だから、結婚して独立する子どもへ両親から贈られる婚資はまず家畜だった。

牧畜民の財産は家畜であり、生活の中心であるためであろう。モンゴル牧畜民は家畜自身に福があると考えている。そのため、家畜を売却するときには、その毛を少し取る。家畜を手放すことによって、家畜の福が持っていられないよう、とっておくのだ。

### 自然災害の被害者は家畜

経済的にも、社会的にも、文化的にも重要な家畜において最大の敵の一つは自然災害だ。とくに深刻なのが先述した干ばつと、雪害である。雪害のなかでも一番大きな被害が出やすいのは草が大雪やアイスバーンによって覆われてしまうことである。そのため、家畜が餓死するのだ。とくに



写真7 牧畜民女性に腕を広げてもらう。両手を広げた長さの半分がデリム。(2005年6月)

干ばつの年は家畜が十分に肥えておらず、しかも、草丈が短いため、直後の冬に被害が大きくなりやすい。死亡だけでなく、不妊や流産も多く発生する。これらは利用できる家畜の減少、ひいては収入の減少を引き起こす。そう、モンゴルでは自然災害の直接の被害者は人間ではなくて、家畜なのだ。大学の講義でこう指摘すると驚く学生が少なくない。いかに家畜が牧畜民にとって重要かが伝わるからだ。

### 家畜の飲み水としての水源の重要性

最後に、雨と並んで重要な水として家畜の飲み水について指摘しておきたい。家畜の飲み水の水源としては川、井戸、泉がある。水がなければ、どんなに豊かな草原も利用できない。もしモンゴルで夏に家畜が放牧されていない豊かな草原を見つけたら、それは水源がないからと考えてよいだろう。だが、雪が降ると、家畜の飲み水がないために利用できなかった草原が利用可能になる。雪が水代わりになるのだ。これは人間も同じである。雪がない季節に利用されなかった牧地は豊富な草が残されており、厳しい冬には最適だ。だから、雪が十分に降らないことも自然災害の一つである。

他方で、わたしが調査をおこなっている内モンゴルの西南部と西部では雪はあまり降らない。そのため、雪害はほとんどないが、干ばつは深刻である。地域によって、重要な水資源や災害の様相が異なるのもモンゴル牧畜の特徴である。

### モンゴル牧畜の多様性

水と同様、草も地域によって異なる。家畜それぞれが好む草が異なるため、草が違えば、地域によってメインとなる家畜も異なる。モンゴル牧畜の特徴は多様な自然環境を一つの牧畜文化がおおっていることであると考えている。そのため、モンゴル牧畜全体として語れるものがある一方で、地域差も大きい。近年モンゴル高原は国を問わず、気候変動、市場経済化、グローバル化、資源開発などによって大きな変化を経験しており、むしろ地域差がさらに大きくなってきているように感じている。モンゴルの面白さは日本との異質性に加えて、この地域間の相違があることである。モンゴル牧畜をその多様性からどう理解していくのかが今後の課題である。

FP